
彼と彼女

星条有砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女

【Nコード】

N0376T

【作者名】

星条有砂

【あらすじ】

どこにでありふれているいじめ。理恵はそのいじめの標的にされてしまった。しかし、不思議な体験とともに体に異変が！この変化は吉と出るか凶と出るか。理恵はいじめに立ち向かって行く。

シリアスなのか不明

出会い（前書き）

2作目です。

タイトルのわりに、あんまシリアスじゃない。
構成すごい事になってるよ？
というわけなので、申し訳ないです。

出会い

それは突然だった。

なんの危機感を感じさせる事もなく。

しかし、確実に追い詰めるように

いじめは始まった。

なにが悪かったのだろうか。

私はなにが悪い事した？

なんで突然嫌うの？

そんなこと分かってる。

イジメなんて、理不尽な奴がする

のだから、理不尽に始まって当たり前
なのだ。

始まりはあの日だ。

理恵の高校は有名な進学校だ。

普通科の中に、特別に有名大学

への進学専門のクラスがある。

1クラスしかないそれは、3年間

クラス替えがない。

よく考えてみれば、ここは逃げ場がない。

しかし、入学前はそこが魅力だと

思っていた。

我ながらに甘っちょろい考えだったと
思う。

しかし、そう思えてしまうほどに、

中学校が良過ぎたのだ。

理恵の中学に仲間はずれ、ましてや
いじめなど全く無かった。
大切な仲間もできた。

その仲間とともに特別進学科に進学し、
青春を謳歌するはずだった。

思えば、初めから抗えなかったの
かもしれない。

片桐絵里初めから理恵を無視していた。
無視とはいかずも、目は合わせず、
話しかけはしなかった。

少し辛くはあった。
でも、思い悩むほどではなかった。

絵里はクラスの中心的存在になり
始めていた。

このままではいけないと、理恵は
積極的に話しかけた。
結構好感触で、今までの事は気のせい
かもしれないと思った。

放課後理恵は忘れ物を取りに教室
に戻った。今の時間帯は、部活に
入っている人が着替えている。
友達には先に帰ってもらっていた。
玄関から入り、階段と横切って教室を
目指す。

息を切らして教室のドアに手をかけたその時、
中から笑い声が聞こえた。

「マジキモくない？」

片桐の声だ。

「なんかさー、土足で領域踏み荒らされた
みたいだね。」

心臓に嫌なざわめきが流れる。

「どうする？ 橘理恵。」

もう決定的だ。もう救い様がない。

「話しかけてきたら、適当にあしらって、
都合の良い時にパシリに使って事で。」

「キヤハハハハ」

頭の中で笑い声がグルグルと回っている
感じがした。

なんかしたのかよ、私が！

こんなこと言われる事でもした
のかよ！

泣きながら走った。

前が見えなくて、何回も躓いた。

泣き過ぎで前に人がいるなんて気付かなかった。

「うわっ」「

慌てて顔を上げると、一之瀬悠がキョトンと
した顔で理恵を見つめていた。

やってしまった。

「ごめんなさい！前を見てなかったの。」

理恵は顔を下げても見られないようにする。

悠も理恵と同じ特進科だが、男子の中

の中心的存在で、理恵とは3年間話すこと
のないはずだった人だ。

「いや、こちらこそ。」

そう言つて悠が手を延ばした様な気配があつた。
理恵は顔を背けたまま手を取る。
その瞬間理恵の魂に何かが介入してきた
様な嫌な感じがあつた。
顔を上げると悠も同じようであつた。

気持ち悪い。

理恵は悠の手を振り払つた。

「ごめんなさい！・・・でもありがとう」

そのまま理恵は走り去つて行つた。

悠は一人取り残され、理恵の後ろ姿を

さっきまで繋いでいた手握つて見つめていた。

「なんだつたんだ今の」

出合い（後書き）

ありがとうございます。

ちよびちよび出ていきますので、よろしく願います。

憂鬱

休日だけが理恵の心休まる時間だった。

家族と少数の信頼できる友達。

それさえあれば他にはなにも要らない。

どうして神様は私を嫌うんだろう。

蘭と静香は私を裏切らない。

理恵の救いはそれだけだった。どんなに周りが敵に回ってもその二人だけは裏切る事はないだろう。

悠は理恵をチラチラと盗み見た。

・・・おんなじクラスだったんだ。

あれから特になんともない手を悠は眺めた。

そしてまた理恵へと視線を戻す。

理恵を眺めていたら、絵里が理恵に近付いて話しかけていた。その時、悠の頭の中に叫び声とある感情が流れ込んできた。

「助けてー！！！」

思わず防げはしないのに耳をふさいでしまう。

これは悲しみ・・・？

流れ込んでくる声は紛れもなく理恵のものだった。

「誰か代わってよ。神様はなんで私を嫌うの？」

周りから友達の心配そうな声が聞こえた。

しかし悠の意識はある言葉にとらわれていた。

誰か代わってよ。

俺が・・・代わる。

意識が引つ張られ、気づいたら絵里の顔が目の前にあった。こいつってこんなかおだったっけ？

「これさ私の代わりに持つてっくんない？」

断れるわけがないと、たかをくくってる絵里の顔は心底不愉快だった。

「ねえ、いいでしょ？理恵ちゃん。」

理恵ちゃん！？

俺が？

もしかして入れ替わってんのか？

まさか、アニメじゃあるまいし。

「ちよつと聞いてんの！！？」

絵里がイライラしてきたのか声を荒げる。

……。こいつって俺の前ではこんな奴じゃないのに。

俺の体のある方では、恐らく理恵が男子に囲まれて驚いたのか素っ頓狂な声をあげていた。

「きゃ！！？・・・え？」

きゃって女の子みたいな声、俺の喉から出せたんだ……。

と素直に感心してしまった。

前に目を向けると絵里がさっきの理恵の声に

驚いたのか、目をあちらの方に向けていた。

あいついつもこいつにこんな事言われてたのか。

暗くなるわけだ。

悠はイライラするのを感じた。

「あのさ、」

突然話しかけられ、絵里は一瞬驚いた顔をした。

「何？やつと引き受けてくれるつもりになった？」

絵里の満足そうな顔にイライラを募らせながら、悠は言い放った。

「引き受けるつもりなんてないけど。自分の事ぐらい自分でしたら？」

悠は立ち上がると、わたわたしていた理恵の手首を袖の上から掴ん

だ。

「来い」

そのまま屋上に向かった。

ボーゼンとしたクラスメイトが残された。

始まり

これは一体どういうことだろうか……。

何かに引つ張られる感覚があったかと思うと、知らない男子の顔が目前にあった。

驚きのあまりヘンテコな声を上げてしまったような気がする。

そして今は自分に手を引つ張られるという、本当に訳のわからない状態になっている。

「あゝ」

気まづくなつて一応自分に声をかけてみる。

「屋上で話すから、ちよつと黙つてて。」

自分にこんなに冷たくあしらわれるとは思わなかった。

理恵は何故か泣きたくなつて、うつ向いた。

「ほら着いたぞ。」

悠が笑顔で振り向くと、目の前に涙でグシャグシャになった自分の顔があった。

「うわ！？なんで泣いてんの？」

てか、俺キモ！！！！

「全然気付かなかった。」

「鳴き声あげないのだけが取り柄なので。」

「なんだその取り柄！」

でもそうだよな、クラスメイトから

あんな仕打ち受けてたんだからな。

きつと誰も見てないところで、

一人で泣いてたんだろうな。
そう思うと、しんみりしてしまつて
何となく理恵の頭を撫でた。
正確には自分の頭なので、
心境的には気持ち悪いこと
この上ないという感じなのだが。
理恵は安心したのか、今度は
少し嗚咽を漏らしながら泣き始めた。
どうせお互い自分だから問題はないだろう。
悠は今の体より十何センチ高い自分の体を
抱きしめ、頭を撫でた。
理恵は最初は体を強張らせていたのだが、
少したつたら悠に体を預けて来た。
理恵が落ち着くまで悠は頭を撫で続けた。

「どうということでしょうか・・・。」

「どうということって言ってもな。」

体が入れ替わったのは事実なんだよな。」

入れ替わったということは

もう戻れないんだろうか。

「そんな悲しいこと言わないで下さい」

「・・・。。。。。。え？」

悠は何も言葉は発していない。

「俺何も言つてないよ？」

「え！？でも確かに聞こえましたけど。」

幻聴？

「さつき幻聴とかいったでしょう！」

「いや、思いはしたけどいってない。」

「え！？」

理恵さん・・・？おーい

はい。

「マジかよ。」

まさかと思って試してみたら、本当に返事が帰ってくるなんて。

「・・・さっきのは聞こえなかったです。」

「もしかしたら、相手に向けて思った事しかきちんと聞こえないかもしれないな。」

二人は悶々と考え込んでいた。

「とにかく今は教室に戻ろう。」

悠は立ち上がって理恵に手を差し伸べた。

その手を理恵が掴むと、またあの気持ち悪い

感覚が手から侵入してきて、あまりの気持ち悪さに、

悠が手を離そうとするが、手は硬く繋がれたまま

ビクともしなかった。

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い

悠の思考が停止しそうになったすんでのところで

気持ち悪さがスッと消えていった。

気づくと理恵の体が目の前に横たわっていた。

・・・戻った？

それを確かめる余裕もなく、悠は意識を手放した。

変革

目覚めたら保健室だった。

「目が覚めたのね。」

保健室の先生が話しかけてきた。

二人で屋上に倒れてたらしい。隣のベッドには理恵が寝ている。目覚める気配はない。

「なにがあつたのかしら？」

なにがあつたつて・・・。

入れ替わつて、号泣されて、抱き締めた。

・・・言えない。

そもそも、信じてもらえない。

「彼女が転ぶのを阻止しようとして、
自分も転びました。」

嘘を並べてみる。

「そうなの。」

二人は付き合っているのかしら?? 「

「いえいえ、それはないです。」

悠は即答した。

「ふふふ、そうよね。この子とあなたは
釣り合わないわ。」

あなたのような子がこないじめられてる
子を相手にするわけないわ。」

ああ、こいつムカつく。

「なにもわかつてないですね。こいつは
一人で戦ってるんです。」

そんな奴が俺にふさわしいわけないですよ。
こいつの方がよっぽど強いから。」

自分の欠点にも気づけない奴が、何
偉そうに人の事馬鹿にしてんだよ。

わかんないよな、お前にはこいつの美しさが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0376t/>

彼と彼女

2011年10月8日23時55分発行